

昭和の南海地震体験談

氏名:小森 正人(こもり まさと)

生年月日:昭和 10 年 3 月 21 日

地震を体験した場所:串本町

当時の家族状況:母、兄(2人)、姉、弟、妹



1)地震発生時の状況

当時小学校 5 年生で、当日は風も雨もなく、気持ちの悪いくらい静かな日だった。

月は満月だった。自宅の二階で寝ているときに地震があり、皆一斉に目が覚めた。母と姉は一階で寝ていた。時間は朝 4 時すぎだった。

地震の際、「ミシッ、ミシッ」というような音がして、ほどうが抜けるのではないかと思った。一階に下りようと思ったが、立ってられない程の揺れで階段の途中で二階に引き返した。地震が治まってから、シャツとパンツ姿のまま外に出て、とりあえず着る物だけ持って、家族総出で西の丘(串本小学校裏山)へ逃げた。

当時、串本には国や県から地震に関する情報提供は何もなく、親から子へ、子から孫へ大きな地震が揺ったら、津波が来るから西の丘へ逃げろという言い伝えだけがあつた。

2)津波襲来時の状況

地震が大きかったので、この揺れだったら津波が来るとすぐに予想した。

近所の人たちも我先に逃げていた。逃げる途中の通路で石垣が根こそぎ道へひっくり返っていた。

暗闇で思うように歩けなかったので、その上を這いながら通り抜けた。

西の丘にある墓の段々の上の方は、逃げた人でいっぱいだった。

そのあたりは砂利が敷いてあり寝そべることができたが、落ち着いてきた頃、寒くていられなくなり、母親が持ってきた毛布一枚にくるまった。

貴重品など一切持たず、着るものだけ持ち出した。2 時間ほど西の丘にいて、6 時すぎには山から下りた。



串本小学校裏から西の丘までの避難道

3)家族の行動・被害

皆同時に避難したので家族の誰にも被害はなかった。

家に戻ると、流れて行った物はなく、ただ濡れているだけだった。

4) 集落・周囲の被害

串本地区で漁師一人だけが津波で死亡した。又、袋地区でも4人の方が津波で死亡した。

ある家族の母親は、当日朝早く買い出しに行く際、用心が悪いからと鍵を掛けて出掛けてしまった。買出し先で地震に遭い、すぐに引き返したが国道が崩れて思うように通れず、家に着いたときには中に残された3人はすでに津波に流されたあとだった。その家は沖に流され、3人の死体は数日後、田子(串本町田子)の海岸で発見された。もう一人は避難している途中で津波に巻き込まれ、死亡している。

串本一体は丸太とゴミで一杯だった。特に串本の東海岸通りは軒先までゴミの塊が手も突っ込めない程、覆いかぶさっていた。

それは到底人力だけでは取り除けるものではなかったが、皆総出で手伝ったので、復旧にはさほど時間はかからなかった。

串本地区は地震がゆった割には、家屋は崩壊しなかった。

5) 地震・津波後の生活

家の角の柱1本が歪んでいただけで、大工さんに直してもらって元どおりになった。

それ以外はどこも補修することもなく、そのまま生活することが出来た。

トイレが溜め込みだったので、汚物が浮いてきて井戸が使えず、陥没していない井戸から水を汲んで来て、その水で米を炊いて食べた。その辺の石を拾ってきたのを積み上げて、釜戸にした。

当時は水道がなく、皆井戸を利用していたので、その後井戸替えをした。

食糧は一日に米2合しか配給されなかったもので、当然足りるはずもなく、農家に米や芋を買いに行ったりもした。毒でなければ、食べられるものは何でも食べた。毛布などの援助物資もあったと聞いている。

6) 次の災害への備え

1944年の東南海地震の当日は、授業中ですぐに西の丘に避難し、潮が引いた後、波が来るのが見えた。

現在、自主防災組織の会長の立場から、各自の住まいからどこに逃げるか、どの道を通って逃げるか、それだけ頭に叩き込んでおけば絶対被害に遭わず、自分の命は自分で守るのが鉄則である。